

二乗

何年み法の席に出て聞いても、一步の進展もなく、花も咲かず、枝も葉も茂らず、光も発せねば、香も出て来ない。それでいて御本人は一かどの信仰家であり、金剛の信心の持ち主である。かかる人が二乗中の独覚である。恐れてもくおそるべきはこの二乗である。

「我ばかりと思ひ独覚心なること浅ましきことなり。信あらば仏の慈悲をうけとり申す上は、我ばかりと思ふことはあるまじく候。触光柔軟の願侯ふ時は、心も和ぐべきことなり。されば縁覚は独覚のさとりなるが故に仏に成らざるなり。」

(御一代聞書)

私どもはこの蓮如上人の御教化の上に、色々なことを教えられる。

我ばかりと思う心が独覚心である。信の人は仏のお慈悲を受けとるが故に、我ばかりと思ふ独覚心にならぬ。であるから、独覚心の人は仏のお慈悲を受けぬ人である。触光柔軟の願あり、仏の光明に触るるものは柔軟心を成就する。信なき人は柔弱におちいり、勝手な信を固めた人は硬直となる。されば真に仏の慈悲の生きない人は、独覚二乗におちる。

真に二乗に堕ちた人は、二乗に在ることを知らない。即ち、如来を知らぬが故に、自己を知らない。自己を知らぬが故に高慢である。しかして教えを合掌して受けぬは僣慢中の僣慢である。

1

二乗は人の助かる世話はするが、自らの第一義の問題については卒業してしまつてゐる。だから蟹の横ばいをして、限りなき深さに歩みきり、徹しきろうとはしない。念仏とは、自己の第一義の問題を放つてしまふことではなくして、永劫かけて、第一義の問題を抱いて生きることである。

樹に生きる生命がなくなつたら枯れた時である。人が第一義の問題を棄てたら死そのものである。だから龍樹菩薩は二乗に墮することを菩薩の死と言われた。

二乗は教えを真に聞こうとはしない。教えによつて我を聞き、教えに随順しようとはしないで、我によつて教えを弄び、我が教えを握つてふりまわし、聞いても勝手にとり、「このたびの説教はわしに合わぬ。」等と言ひ、痛い所に触れられると悪口をついて逃げてゆく。

二乗は名利を追う。

二乗は如来招喚の一道を精進しないで、鰻のように泥の中を名利愛欲のまゝに泳ぐ。

二乗は、教法によつて己を折り、己の手元を下げたてて生きさせて頂こうとはしないで、我を張つて法をまげることが、自ら世に害毒を流していることを知らない。二乗は人をも二乗に誘う。

仏教では、耳に入る世の様々な声や教えに盲従することを許さない。たとえ正しい教えですら盲従することは正信ではない。聞く耳、信ずる眼が何よりも重んぜられる。二乗はその耳を持たない。

したがつて二乗は真実に真実教と邪教との見分けをつけてはいない。だから二乗の人の歩みは必ず不純である。

古い木の株は葉を出してもちぢれあがつている。ねじれかえつた古木の株のように、ちつとも成長しないのが二乗である。

心の胃の腑にたまつて消化しないだけが傲慢の種となつて残る。

消化しない胃を持ったものは、病重り、やがて死ぬる。

二乗は仏法僧の三宝に真実に帰依しない。

二乗は、我をもつて人を見て、人の上に己を見ない。

したがつて一切衆生と自己を絶縁して、一切衆生に随順しない。だから、悪人はいない。自己の中に愚悪を諦観していないから、皆ひとりよがりの聖賢であり、善人である。

大法、汝に空虚なる名利を成就せず、ただ汝の真相を、大法の尊厳を知らしむ。したがつて如何に大法を深解すとも、真実の念仏者は微塵の慢心を持たず。

2

二乗は、御恩を知らず、仏恩報謝の営みがない。

二来の世界に墮してはならない。それはまことに恐るべき暗である。だが我等は二乗に墮ちんとする心をもっている。常に、如来の智慧光に照被されて、二乗の心を慚愧しなければならぬ。二乗ではないと思つている間に、知らず知らずの間に二乗に墮ちる。

如来のみ光に照されつつ、永久に大法を聞かねばならない。

二乗の心の底には、必ず大悲をはねのけ、仏智に対する疑惑が残つている。根本は疑惑である。その疑惑がおおい包まれているのである。

真実の二乗ならまだしも、凡夫の上にあるものは、ただ二乗の臭味である。臭味がこうじてしまえば、ついに助からなくなる。